

身延在山中の日蓮聖人

——心境の推移をめぐって——

上 田 本 昌

一、

身延山の西谷に草庵を結び、晩年の九年に及ぶ生活は、まさに大自然と共にある起居であり、法華經の説誦・解説・書写等の五種修行をするのには、静寂の環境として、最適の地であったと考えられる。

日蓮聖人のこの晩年は、その遺文によって心境や教義、並に行跡と共に、草庵の周囲をとりまく自然界の状態についても、詳細に記述されている。それによると、「法華經の行者」として、「仏使」の道をあゆまれた宗教人としての聖人は、その心境においては、まさに「如来の座につき、如来の事を行ずるなり。」という境界から、身延山をインドの靈鷲山や、中国の天台山に、勝るとも劣らぬ勝れた靈山とみなしているのである。

しかし、一方にあって、身延山の置かれた地理的条件や、自然の現象は、現在以上に厳しく、予想を越えた困難さがつきまとっていたことも事実である。特に冬期は霜雪が強く交通不便な山間僻地であったので、晩年を迎えた聖人の健康上からは、また、生活面からも、必ずしも好適地であったとは、言いにくいところも少なくない。

すなわち、遺文の上から見ると、身延山をもって、最高に勝れた靈地とみなしているものに、「我身法華經の行者

身延在山中の日蓮聖人（上田）

ならば、靈山の教主釈迦・宝淨世界の多宝如来・十方分身の諸仏・本化の大士・迹化の大菩薩・梵・釈・龍神・十羅刹女も、定て此砌におはしますらん。水あれば魚すむ、林あれば鳥来る、（乃至）今此所も如此。仏菩薩の住給功徳聚之砌也。」とあり、曼荼羅勸請の諸仏諸尊來集の功徳集であり、淨土であることを明示している。また、

「神力品云、若於林中若於樹下若於僧坊乃至而般涅槃云云。此砌に望まん輩は無始の罪障忽に消滅し、三業の惡転じて三徳を成ぜん。（乃至）彼月氏の靈鷲山は本朝此身延の嶺也。」

とあり、身延山をもつて靈山淨土とみなし、「事の寂光土」としてゐることが、明らかである。この他にも、「天竺の靈山此処に來れり、唐土の天台山親りここに見る。」とも述べ、「伝聞く釈尊の住給けん鷲峰を我朝此砌に移し置ぬ。」とも記しているのである。

こうした遺文から見て、聖人がいかに身延山を重視し、かつ尊貴の処として考えていたかがわかるであらう。ただ単に晩年をすごした山だから大事だというのではなく、純粹に宗教的な悟道の世界であり、寂光淨土の境界とみなし、本仏釈尊を始めとする曼荼羅中の諸仏諸尊と、昼夜にまみえることのできる砌であるとしている。すなわち「本門の戒壇」であり、娑婆即寂光の妙境として、一乗妙典の読誦・解説・書写に終始されたのであった。

しかも、この境地に在るのは聖人一人だけではなく、この砌りにのぞまん輩は、「無始の罪障も定て今生一世に消滅すべきか。」という師弟共に罪障消滅し、「三業の惡転じて三徳を成ぜん」という果報が得らることになるとするのである。すなわち、月氏の靈鷲山と同等であるこの本朝身延の山に參詣することにより、大果を得ることができるといふことは、身延山をもつて「靈山淨土に劣るべき」尊嚴な淨土とみなしていたことの現れであるといえよう。

地形的には、人倫を離れた山中であり、東西南北を去って里もなき、心細い幽窟であるが、教主釈尊の一大事の秘

法たる妙法を、靈鷲山において相伝した法華經行者の住処であるので、末法における事の寂光土であることは、間違いないものであるとし、「諸仏入定の処」であり、「正覚の砌」であるとしているのである。

こうした考えは、身延期の中でも、比較的に中期から後期にかけての遺文に多く見られるところである。初期から中期にかけては、どちらかというと、地理的に辺鄙な場所として、氣象現象の極めて厳しい山中であることを述べ、実生活の上では、甚だ不便難渋をしていたことを素直に披瀝している。

二、

入山当初における西谷での日常生活は、衣食住ともに、清貧に甘んじたものであった。すでに入山の途次、「飢渴申ばかりなし。米一合もうらず。餓死しぬべし。此御房たちもみなかへして但一人候べし。このよしを御房たちにもかたりさせ給。」と語っている点から見ても、当時の食生活を察することができるであろう。

西谷の草庵に入られてから約一か月後に、上野殿から「鷲目十連・かわのり二帖・しやうかう二十束」が送られてきた。その礼状によると、

「今年のけかち（飢渴）に、はじめたる山中に、木のもとに、このはうちしきたるやうなるすみか、をもひやらせ給。」

とある。聖人の当時は、すでに『立正安国論』に見られるごとく、飢饉・不作・天変等により、連続して食糧難の年が、国土を襲っていたようである。飢渴という悪条件のもとで始まった山中の生活は、樹の元に木の葉を敷きつめたような住居であったというのであるから、食生活も住居も極めて質素そのものであったろうと推察できる。

庵室については、周知のごとく十二の柱からなる木造の木皮葺で、一か月間で建立した応急の簡易住居であったことがわかる。したがって三年半後の建治三年（一二七七）には、もうすでに改築しなくてはならない状態にまでたち至っているのである。

「去文永十一年六月十七日に、この山のなかに、木をうちきりて、かりそめにあじちをつくりて候しが、やうやく四年がほど、柱くち、かきかべをち候へども、なをす事なくて、（乃至）十二の柱四方にかふべ（頭）をなげ、四方のかべは一所に倒れぬ。」

と記しているが、「かりそめのあじち」とはいえ、わずか三年半でこのようなありさまになるということは、建築様式にもよるが、いかに粗末な草庵であったか推察できよう。これについては、当時の家屋建造に関する技術上の問題もあったであろうが、その他に次のような点が考えられうる。

第一は、聖人自身が、入山の当初において、『富木殿御書』中に語っているように、「いまださだまらずといえども、大旨はこの山中心中に叶て候へば、しばらくは候はんずらむ。結句は一人になて日本国に流浪すべき身にて候。」とあるごとく、まだ身延山常住の心境ではなかった。「しばらくは候はんずらむ」というのは、「しばらくは居住することになるでありませんか」という意味であり、「らむ」の助動詞は、未来・推量・意志を表わす終止形の語であるから、「しばらくは居ようと思う。」という未来についての行動を推量した意志を表明したことになる。したがって、領主の南部六郎実長が、その聖人の意志をくんで、本格的な永住用の建築ではなく、あくまでも「しばらくの間」居住にたえる程度の「かりそめのあじち」を建立することに落付いたものといえよう。

次に、第二は身延山の風雪による気象条件が、平野部と違って厳しいものであったことも、草庵の耐久力を弱めた

一因としてあげることができよう。例えば弘安三年正月二十七日に秋元太郎兵衛へ宛た書簡によると、

去年十一月より雪降り積て、改年の正月今に絶る事なし。庵室は七尺、雪は一丈。四壁は氷を壁とし、軒のつらゝは道場莊嚴の嬰珞の玉に似たり。内には雪を米と積む。本より人も来らぬ上、雪深して道塞がり、問人もなき処なれば、現在に八寒地獄の業を身につくのへり⁽¹¹⁾

といった状況が描かれている。文章の修飾上の問題も、多少考慮しなくてはならないかもしれないが、しかし現実冬季の風雪寒冷は現代をはるかに凌ぐものであったことがわかるであろう。弘安元年十一月廿九日付で、兵衛志に送られた書簡によれば、

今年は余国はいかんが候らめ、このはきぬは法にすぎてかんじ候。ふるきをきなどもととひ候へば、八十・九十・一百になる者の物語候は、すべていにしへこれほどさむき事候はず。此あんじちより四方の山の外、十丁二十丁人かよう事候はねばしり候はず。きんべん一丁二丁のほどは、ゆき一丈・二丈・五尺等なり。(乃至)この月の十一日たつの時より十四日まで大雪下て候しに、兩三日へだててすこし雨ふりて、ゆきかたくなる事金剛のごとし。いまにきゆる事なし。ひるもよるもさむくつめたく候事、法にすぎて候。⁽¹²⁾

とも記されている。こうした豪雪にあい、凍結の厳しい中で生活は、まさに雪や氷との根気くらべであったといえよう。しかもこうした「法にすぎて」の気象現象は、冬季のみではなく、春になっても「山中のながきあめ」⁽¹³⁾が続き、秋にもまた「長雨大雨時々日々につづく」⁽¹⁴⁾という状況で、山崩れがあり、川はたけり狂ったように荒れて、陸の孤島となって、人の交通は全く閉ざれてしまうこともあった。

実際に西谷の草庵跡地に佇てみると、谷は深く、山がそそり立っているので、日照時間は短かく、特に冬季は

現在でも、一日わずかに三・四時間程しか与えられない。こうした状態では、一か月で建立したという草庵が、永く当初の形態をたもっておられることは、きわめて困難なことであつたといえる。建治三年の冬、一旦は修復したといふものの、このような厳しい風雪にあつては、耐えることができないものも当然であると考えられる。

三、

身延山に九年間も在住していたにもかかわらず、生活環境がこのように質素であり、特に衣食住については、最低限度の線を維持してきた点について、疑問視する向きもあるが、これは如上のことから、やむをえなかったことと考えられるのである。

入山の当初から、常住の意志がある程度あつたとしたら、恐らくは三・四年の間に壁落ち、柱傾き、屋根に穴があくといった応急の草庵ではなく、多少なりとも堅固な庵室になつていたであらうと推察できる。「しばらくは」居住するつもりで、やがては「日本国に流浪すべき身」という当初の考えは、こうした草庵建築の上にも、大きく反映されていたと見ることができよう。いかに風雪が厳しく、自然現象の激しい所であつたにしても、僅か三年五月で老朽化することとは、建立の当初に、一時しのぎの草庵として設置されたものであることを裏付けているといえるであらう。

ところが、この「しばらくは候はんずらむ。」という意志は、周知の通り、在住するに従つて変化して行つたのである。「仏使」として、強い信念と実行力を持った聖人だけに、力の及ばん限りは、折伏逆化の布教活動を続行する信念を持ち、日本国に弘通すべき身として、一か所にとどまるといふようなことは、考えておられなかったのかもしれない。

れない。たとえ身延入山後といえども、この信念だけは心中に持っておられたであろうと推察することができる。それが上記の草庵建築によく表されているとも考えられる。

しかし、実際には、「又たちとどまるみ（身）ならば」と述べられている通りになって行ったのであった。入山の二年後、建治二年七月には、道善房菩提のため『報恩抄』を著しているが、その文中で「火にも入り、水にも沈み、走りたちでもゆひて、御墓をもたたいて経をも一卷読誦せんとこそをもへども、賢人のならひ、心には遁世とはをものはねども、人は遁世とこそをもうらんに、ゆえもなくはしり出づるならば、末へもとをらずと人をもうべし。さればいかにをもうとも、まいるべきにあらず。」と記しているように、簡単に下山し、他所へおもむくようなことは、考えておられないのである。

さらに、弘安元年には、いかなる事があっても、身延を離れる意志のないことを表明し、「甲斐の国の深山に閉籠らせ給ひて後は、何なる主上女院の御意たりと云へども、出¹⁴三山内¹⁵諸宗の学者に法門あるべからざる由仰せ候。」と述べているごとく、この頃には下山の思いはすでになく、常住の念が堅いことを知ることができる。入山当初の「日本国に流浪すべき身」は、逆に身延を離れぬ身と推移してきているのである。

わずかな年月の中に、仮りの住居としての入山から、「ゆえもなくはしり出づる」ことはできない身の上であるとする定住へ移り、さらにいかなることがあっても下山して他所に移り住むといった考えのないことを明らかにして、やがては「いづくにて死に候とも、墓をばみのぶの沢にせさせ候べく候。」¹⁷という永住へと推移し、ついに今生のことだけではなく、永遠に身延に住むことを明らかにしているのである。

この「仮りの住居」から「常住」へ、そして「永住」へと移り変って行ったプロセスには、何があったのであろう

か。聖人の心中を推察するとき、そこにはまたいくつかの理由があったものと考えられてくる。

当初が「仮りの住居」であり、「しばらくは」居住するであろうと考えていたことはすでに上述のごとく明らかであるが、これは草庵の構えからいっても首肯できよう。しばらくの間、たもてばよしとした当初の心境を如実に証しているものといえる。

ところが、二、三年の間に「ゆえもなくはしり出づる」ことはできないとし、旧師の遷化にあっても、ついに下山することなく、周囲の人々が「いかにをもうとも」身延を離れることはできないとしているのである。本来ならば、ただちに山を下って墓参・読経すべきところであるが、それをとどめて身延から離れることをしなかったのはなぜであらうか。

その理由として、「心には遁世とはをもはねども、人は遁世とこそをもうらん」と述べている。つまり聖人自身は、遁世とは考えていなかったが、世人は身延入山を即遁世であると思っているからであるとしている。この当時は、一旦俗世間の諸事からのかかわりを断って、深山に入り、遁世の道を選んだ場合は、よほどの事があっても、再び人里へ戻ってくることは、考えられないこととされていたようである。まして出家沙門の身が、意を決して入山し、世人から遁世とみなされていたとしたら、たとえそれが自身にとって遁世ではないにしても、身延を離れることは、「末へもとをらずと人をもうべし」という結果を招くことになり、嘲笑を受けることになると考えたからである。

ここで問題となるのは、聖人の「身延入山」について、④聖人自身は遁世であるとは考えていなかったこと。⑤ところが世人は遁世であると思ひ込んでしまっていたであらうこと、の二点があげられる。つまり入山について、聖人

の意志とは違った考え方が世人の間にあったことがわかる。

聖人本来の立場からすると、自身の考えが誤って伝えられ、世間にゆがめられて伝播したとしたら、直に釈明を行い、正当な理由を明確にするための努力を惜しまないはずである。その前半生が折伏によって貫かれていた点からみても首肯できよう。しかるに、世人が遁世と誤っているようなので、本心とは違ふけれども、下山することはできないとする文中には、かなりの複雑な心情をみてとることができるといえよう。聖人の言外にある本心が文字の中に含蔵されているとも考えられよう。「人は遁世とこそをもうらん」の一文の中には、考えようによっては、世人にはかえって遁世と思わせておいた方がよいのではないか、という解し方もできるように考えられてくるのである。

通常であれば、④の立場が、間違つて、⑤の立場で伝えられたとすると、当然のことながら、⑤を強く否定し、自身の立場を表明して行くべきであるが、それがなされていないのである。即ち本来は④だが、⑤として伝わっているので、下山しないでいるのだとしたら、この場合、ある程度、⑤をそのままにしておいたことになり、強い修正がなされていない点からみて、⑤を⑥なりに扱っているといえよう。

いわゆる⑥をそのまま全面的に認めたというのではなく、消極的ながら、ある面ではこれを容認した形になっているとも考えられよう。事実別の遺文の中には、遁世と解することができるような表現もみられるのである。一例をあげるならば、

「抑も日蓮は日本国をたすけんとふかくおもへども、日本国の上下万人一同に、国のほろぶべきゆへにや、用ひられざる上、度々あだをなさるれば、力をよばず山林にまじはり候ぬ。」¹⁸⁾

「此所をば身延の嶽と申す。(乃至) たまたま見るものはやまかつがたき木をひろうすがた、時時とぶらう人は昔

身延在山中の日蓮聖人(上田)

なれし同朋。彼の商山の四皓が世を脱れし心ち、竹林の七賢が跡を隠せし山もかくやありけむ。」⁽¹⁹⁾

とあって、いかにも中国の四皓・七賢が世をのがれ、力およばず遁世した姿と、わが身を同様にみている一面もあるので、③の立場を強力に否定されることをしていない。特に入山の当初にこの考えが濃厚であり、次第に遁世ではないことを表明されるに至っているのである。

四、

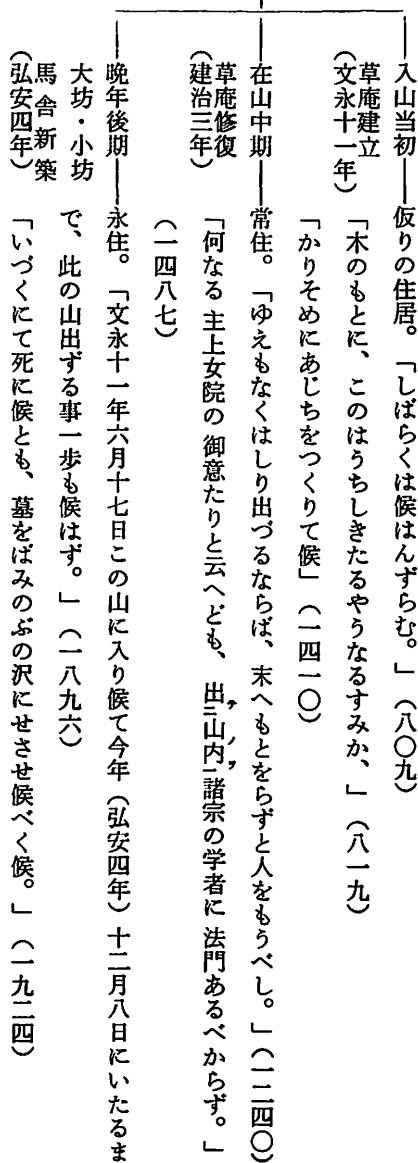
それでは、聖人の在山中における心境のこうした変化は、どこに由来するのであろうか、というに、もちろん宗教的な深い思惟から発していることが考えられるが、入山当初の複雑な心境が、身延という大自然の中で、一代を振りかえりつつ、「人間日蓮」としての立場と、「仏使日蓮」としての立場から、自ずと複合性を持った心の表れ方になって行ったものと考えられるのである。

先ず、「人間日蓮」としての立場からすれば、前述の御書にすでに明らかなごとく、「力をよばず山林にまじはり候ぬ」であり、商山の四皓や竹林の七賢と同様に「跡を隠せし山」への入山であった。「結句は一人になて日本国に流浪すべき身」であるという消極的・人間的な一面をあげることができよう。入山の翌年七月に高橋入道へ宛た書信には、「かまくらより此ところへにげ入候ひし時」とさえ述べている。

しかし、これは聖人の複合性を持った厚い心中における一部の感慨であり、これをもって直に聖人の心中のすべてであるかのごとくに考えることは、早計といわねばならない。在山中の聖人は、他所では見られない程に、人間的な一面を濃厚にしているといえる。一例をあげれば、檀徒の中に不幸があった場合や、不運の目にあった時など、共に

悲しみつつ涙を流しながらの激励や慰めをおこない、また悦ぶべき時には、素直に心情を吐露して歓喜されているのである。「涙ひまなし」の情愛をこめ、門下と共に悲しみ、共に悦ばれているのである。この在山中の人間性については、すでに論究をおこなっているのです、ここでは重説をさけることにするが、晩年の聖人における心中の一部門を現したものとすることができよう。

身 延 在 住



これに対して、「仏使日蓮」としての立場は、在山中の各御書の中で、明示されているように、「日蓮は閻浮第一の法華経の行者なり」という自負から、「仏の御使として世間には一分の失なき者」という自覚をもって、身延山を本朝の靈鷲山とみなし、靈山浄土であって、法華経の根本霊場とさだめ、末法万年の拠点とされるに至っているのです。

身延在山中の日蓮聖人(上田)

ある。

この「人間日蓮」としての立場、すなわち「日蓮は凡夫なり」⁽²³⁾という時と、「仏の御使」という時とは、自ずと立場が異ってくるわけであろうが、聖人の場合はこの二者は矛盾することなく、一身の中にあって、「法華経行者」の二面性を持統されていたものと解することができるのである。つまり、「凡夫日蓮」と、「仏使日蓮」は、全く別の存在というのではなく、「法華経行者」の一身の中に収まり、「日蓮は幼若の者なれども、法華経を弘むれば釈迦仏の御使ぞかし」⁽²⁴⁾という両面性を持った存在であったといえるのである。ここに聖人のまた複合性をもった末法の導師としてのあり方を知ることができるといえる。

「日蓮は怯弱の者にて候へば」⁽²⁵⁾という場合は、「人間日蓮」であり、「凡夫日蓮」を指しているといえる。建治二年に光日房へ宛た御書の中で、「父母のはかをもみよかしく、ふかくをもうゆへに生国へはいたらねども、さすがこひしくて、吹風、立つくもまでも、東のかたと申せば、庵をいでて身にふれ、庭に立ちてみるなり」⁽²⁶⁾という父母をなつかしみ、望郷の念やるせなき身を、素直に表現している。まさに「人間としての日蓮」が筆をとったものといえよう。その幼若なる「人間日蓮」が、「法華経を弘めること」により、「釈迦仏の御使」として、「日蓮は日本国の棟梁也、予を失ふは日本国の柱礎を倒すなり」⁽²⁷⁾という仏使の立場に、そのまま移行していくのである。強盛の信念を持って、法華経を弘めることにより、閻浮第一の行者となり、仏使としていかなる迫害にも屈しない不退転の信に生きられたのである。

つまり「人間日蓮」は、法華経弘布という実践を通すことにより、「仏使日蓮」としての立場に、そのまま展開して行くことになるのである。但し、この場合「仏使日蓮」となったからといって、「人間日蓮」か否定され、消滅し

てしまうというのではない。「人間日蓮」の中に展開された「仏使日蓮」とでもいうべきものであり、どちらか一方に立つことによって、他方が否定されるというのではないのである。すなわち、「仏使日蓮」の立場にあって、法敵を折伏する勇猛精進の場合であっても、門下の不幸に対しては共に涙を流して慰めるという人間性を失っていないのである。



五、

このようにみてくると、身延山の聖人は、「人間日蓮」としての一面と、「仏使日蓮」としての一面を、双方一身に備えての入山であり、時・機にしたがって対応されていたとみなすことができる。

したがって、同じ身延山を、交通不便な辺境とみなし、八寒地獄の苦難を味わっていると述べて、⁽²⁸⁾ 人間的に耐えがたさを訴えている一面がみられるが、その反面にはこの身延山は自然の美しい所で、景観の佳さを述べ、最も勝れた山として、靈鷲山に勝るとも劣らぬ靈山であるとし、法華經行者の住所なるが故に、浄土であって根本の地であると論じ、仏使の立場で身延を最勝最尊の地としているのである。⁽²⁹⁾

或る時は、「人間日蓮」の立場で、身延山は辺境な難所にあつて、衣・食・住共に窮乏であり、苦難の生活を送っている所であり、訪ねて来る者ともなく、隠棲のわび住いであつて、弟子らや付き人らにも捨てられたような日常であるとし、⁽³⁰⁾ 身延生活をこの上なくわびしいものと感じ、消息文に赤裸々な人間性を滲ませているのである。

身延在山中の日蓮聖人（上田）

そしてまた或る時は、閻浮第一の法華經の行者、すなわち「仏使日蓮」の立場にあって、同じ身延山をもって、人倫を離れた心細い幽窟ではあっても、教主釈尊の一大事の秘法を相伝した行者の住所であるので、いみじき山であり靈山淨土に劣らざる所であって、無始の罪障も忽に消滅する聖地であると感受しているのである。「彼月氏の靈鷲山は本朝此身延の嶺也」という立場は、まさに「本化仏使」としての領域であるといえよう。

身延山という同一住所であっても、聖人の心にはこのように、正反対とも思えるような映り方をし、しかも矛盾せずに時にふれ、折りにふれつつ人間性と靈性の両立場を持続されていたのである。これは一見、奇異なことのように考えられるかもしれないが、再往はむしろこのような感受をされることの方が、当然だといえるのである。「仏使日蓮」といえども、「人間日蓮」を離れて、全く別の存在というのではなく、「人間日蓮」の中に、「仏使日蓮」が存在し、「仏使日蓮」はまた「人間日蓮」の中から展開して行つたのであるから、両者は共に「法華經の実踐者日蓮」の中にあるのである。

したがって、両者が全く別個に存在し、それぞれに交渉をもっていないと考えることの方が、奇異であるといわなくてはならない。「二にして一」であり、「一にして二」なる存在ということができよう。このことを証する御書は、在山中の諸御書に散見しているので、挙げるまでもなからうが、敢て一書の例示をするならば、建治二年三月の富木入道に与えた『忘持經事』がある。

「峨々大山重々、漫々大河多々、登高山二頭、并天下三幽谷、足踏雲、非鳥難、渡非鹿難、越眼眩足冷羅什三蔵、葱嶺・役優婆塞、大峰只今、云云。」

とあって、富木入道がはるばる下総国から甲州身延山へ至るまでの道中について、その難儀の状態を表したものであ

る。多少文章上の綾はあるにせよ、当時の身延への路は、相当の不便さであったことがわかる。四山四河に囲まれた峽地は、鳥獣のような身のこなしや足の強い者でなくては、なかなか困難であったであろうし、眼眩み足冷ゆる旅であったことを推察できる。つまりこのような辺境な交通不便、要害の地で、人間が住むには適しないような所であることを記しているのである。いかにも苦渋に満ちた環境であることを知らしめているのである。ところが、

「然後、尋^ニ入^ル深洞^ニ見^ニ一庵室^ニ。法華經誦誦^ニ音響^ニ青天^ニ。一乗談義^ニ言聞^ニ山中^ニ。触^ニ案内^ニ入^ル室教主^ニ積尊^ニ御宝前^ニ安^ニ置^ニ母骨^ニ五体^ニ投^ニ地^ニ合掌^ニ開^ニ兩眼^ニ拜^ニ尊容^ニ。歡喜余^ニ身心^ニ苦^ニ忽息^ニ。」

と続くのである。すなわち、身延に至るまでの苦難に満ちた道程は、ここにおいて一変し、妙經の音声天に響き、山中には一乗の談声が涌く靈境となり、教主積尊の御宝前にぬかずいて母の遺骨を奉じ、歡喜のあまりに身心の苦しみが、たちまちに消滅したという、まさに浄土への登詣を表しているといえよう。

このように一書の中でも、苦難の環境であることを示す一文と、その中であって、なおかつ浄土としての存在を示す一文とが見られるのである。人間としての一面と、仏使としての一面を、一身の中に調和させながら、身延での生活を送られていたことを知る一書ということができよう。一見矛盾とも思える二つの立場が、身延の大自然に交った聖人の心中で調和しながら持続されて行ったものと考えられる。人間の心理は複雑なもので、一概に決めつけるわけにはいかないものであるが、特に一世の聖者・偉人と称される人々の間では、心の推移において、一層重厚なものであることは、論をまたないであろう。ましてや聖人のように、深い宗教的な自覚や使命感に生きられた場合にあっては、凡人の推測をはるかに越えたものがあつたであろう。

最後に、身延山の聖人における心境の推移について、上述のごとく思想的・宗教的な理由の他に、もう一つ健康上

身延在山中の日蓮聖人（上田）

の問題を付け加えておきたい。すなわち、「かりそめのあじち」として、「しばらくは候はん」という心境から、「ゆえもなくはしり出づる」ことはできないとし、さらに「何なる主上女院の御意たりと云へども」出山は考えていないとする心構え、そして、「此の山を出ずる事一步も候はず」「いづくにて死に候とも、墓をばみのぶの沢に」という常住から永住へと移って行った心中には、聖者としての心境も充分に考慮されなくてはならないが、これにもう一つは聖人自身の健康上のことが、加わってくるものといえよう。

入山して三年たった頃、即ち建治三年の暮には、消化器疾患になり、下痢に悩まされている。永い間の勇猛精進による救済活動から、北海の孤島佐渡島の流人生活を経て、身延入山を果した聖人してみると、健康上の無理をして、激しい「行者」としての日常から身体に不調をきたしても、不思議はない程の生活ぶりであったろう。

加えて身延の冬は厳しく、豪雪・寒冷の山間にあつては、健康に相当恵まれた者であっても、その影響は大きいものがあつたにちがいない。翌弘安元年の六月頃になると、病状はさらに悪化していった。

「日蓮下痢去年十二月三十日事起り、今年六月三日・四日、日々に度をまし月々倍増す。定業かと存処に貴辺の良薬を服てより已来、日々月々に減じて今百分の一となれり。」⁽³²⁾

「はらのけ（下痢）はさあもん殿の御薬になをりて候。又このみをなめて、いよいよ心ちなをり候ぬ。」⁽³³⁾

と記している。これ以来聖人の病状は一進一退をたどりつつ、加齢・環境・気象条件等により、次第に衰弱し、弘安四年に入ると春以来病勢が強まって、筆を執ることも思うように行かなくなっていた。その年の十一月には、厳しい冬の冷え込みにあつて、さらに悪化し、「老病の上、不食気いまだ心よからざるゆへに、法門なんどもかきつけて申さずして、さてはてん事なげき入て候。」⁽³⁴⁾と病悩の状況を記している。

食欲も衰え、体力も減退し、弘安五年の冬を越すことは困難と思えた。弟子・信徒らの勧めにより、常陸の湯で療養すべく、ついに九月八日下山することになったのである。この時は、すでに一年前、大坊・小坊・馬舎をもった寺院として、草庵の生活からは離れて、設備も一応は調っていたとはいえ、重い病状の聖人にしてみると、厳しい寒冷の山地では、相当な影響を与えていたにちがいないだろう。⁽³⁶⁾

こうした健康上の問題も加味しなくてはならない。恐らく健康に恵まれていたとしたら、入山当初の考え通り、時期を選んで、日本国中を巡り、法華信仰の流布に、旅を重ねておられたであろうとも推察できよう。不惜身命の弘通は、聖人の使命とするところであり、一天四海・皆帰妙法の理想実現までは、身を休ませる間など考えられなかったことといえる。

身延山に常住し、さらに永住されるに至った主因は、上述の諸要件と共に、こうした聖人自身の健康上の問題も、無視するわけにはいかないものがあるといえる。⁽³⁶⁾『玄旨本尊添状』・『別頭統紀』や『高祖年譜』の伝えるところによれば、弘安五年十月十一日、池上での入滅に先立って、経一塵を枕辺に召し、帝都の弘通を委嘱されている。⁽³⁷⁾おそらく、身延山で『撰時・報恩』の兩抄を著作し、一代の教学をしめくられたあと、健康が許せば、聖人自身、帝都への弘通に上り、献身その大任を果しておられたのではないかと、とも推察できよう。

ところが、入山間もなく病身となったことも一因となって、三年四年と在山するうちに、すなわち、初期から中期にかけて、離れ難い心境に進み、次第に身延の山を靈山浄土として受容され、ついには身延以外の地へ出て行くことは、全く考えられない心境へと推移していったものと考えられる。以上の所論から、聖人の身延永住は、複合性をもった心境の上に、成立していったことが知られるであろう。

身延在山中の日蓮聖人（上田）

〔註〕

- (1) 四糸金吾殿御返事 定遺 一八〇一頁
- (2) 南条兵衛七郎殿御返事 同 一八八四頁
- (3) 松野殿女房御返事 同 一六五一頁
- (4) 身延山御書 同 一九一五頁
- (5) 「大崎学報」第一三九号の拙論「身延山における日蓮聖人の教学」（二頁以降）を参照されたい。
- (6) 四糸金吾殿御返事 定遺 一八〇一頁
- (7) 富木殿御書 同 八〇九頁
- (8) 上野殿御返事 同 八一九頁
- (9) 庵室修復書 同 一四一〇頁
- (10) 富木殿御書 同 八〇九頁
- (11) 秋元御書 同 一七四〇頁
- (12) 兵衛志殿御返事 同 一六〇五頁
- (13) 霖雨御書 同 一五〇四頁
- (14) 上野殿御返事 同 一五七二頁
- (15) 報恩抄 同 一二四〇頁
- (16) 教行証御書 同 一四八七頁
- (17) 波木井殿御報 同 一九二四頁
- (18) 上野殿御返事 同 八三六頁
- (19) 新尼御前御返事 同 八六四、五頁
- (20) 「榎神」（第四十一号）拙論「身延山における日蓮聖人の人間的一面」を参照。
- (21) 別当御房御返事、八二八頁。並びに撰時抄 一〇一九頁
- (22) 神国王御書 定遺 八九二頁
- (23) 撰時抄 同 一〇四九頁

- | | | | |
|------|---|----|-------|
| (24) | 種々御振舞御書 | 定造 | 九七六頁 |
| (25) | 弥源太入道殿御返事 | 同 | 八三二頁 |
| (26) | 光日房御書 | 同 | 一一五五頁 |
| (27) | 撰時抄 | 同 | 一〇五三頁 |
| (28) | 秋元御書 | 同 | 一七四〇頁 |
| (29) | 南条兵衛七郎殿御返事 | 同 | 一八八四頁 |
| (30) | 妙法比丘尼御返事 | 同 | 一五六四頁 |
| (31) | 忘持経事 | 同 | 一一五一頁 |
| (32) | 中務左衛門尉殿御返事 | 同 | 一五二四頁 |
| (33) | 兵衛志殿御返事 | 同 | 一五二五頁 |
| (34) | 老病御書 | 同 | 一八九六頁 |
| (35) | 身延山における聖人の健康については、宮崎英修博士が、「大崎学報」(第一〇三号)の中で、すでに研究されているので、参考されたい。 | | |
| (36) | 上野殿母尼御前御返事によれば、「ただし八年が間やせやまいと申し、齡と申し、とし／＼に身ゆわく、心をほれ候つるほどに云云」(一八九六頁)とあって、在山九年のうち、八年までは軽重の差こそあれ、何らかの病状があったことを知ることができる。すなわち、入山一年後頃から、すでに病身であったようである。 | | |
| (37) | 『玄旨本尊添状』(宗全上聖部三四頁参照)。「高祖年譜」に「命 ^ニ 経 ^一 麻呂 ^二 曰、汝蛋祝髮 ^智 行兼備 ^以 唱 ^三 海帝郷 ^一 」(五一)とあり、『別頭統紀』には「親召 ^ニ 経 ^一 麻呂 ^二 曰、乃至 ^三 莫 ^レ 忽 ^三 帝都弘経 ^一 」(八一―二五)等と伝えている。 | | |

身延在山中の日蓮聖人(上田)